

2025 年度

工学部 人文社会科目運営会議

自己点検・評価報告書



2025 年 7 月 25 日

目 次

0. 定義	3
第1章 学修・教育到達目標	3
1. 現状分析	3
2. 分析を踏まえた長所と問題点	4
3. 改善・発展方策と全体のまとめ	4
4. 根拠資料	5
第2章 教員	6
1. 現状分析	6
2. 分析を踏まえた長所と問題点	6
3. 改善・発展方策と全体のまとめ	7
4. 根拠資料	7
第3章 教育プログラム	8
1. 現状分析	8
2. 分析を踏まえた長所と問題点	12
3. 改善・発展方策と全体のまとめ	12
4. 根拠資料	12

0. 定義

この報告書では、「人文社会科目」とは、担当教員の組織（集合体）をいう。「人文社会系教養科目」とは、授業科目をいう。

第1章 学修・教育到達目標

1. 現状分析

人文社会系教養科目では、教育方針を以下のように設定している。

科学技術と人間社会との関わりについて、幅広い知識や見方、考え方を身につけることを目的とする。そのために、技術やものづくりと密接に関わる人間の行動や心理、人間が創り出した多様な文化や思想、政治制度や経済システム、さらには今日の世界が直面する経済や社会、環境などの様々な問題を学ぶことができる。

続いて各課程のカリキュラム・ポリシー、学修・教育到達目標と人文社会系教養科目のカリキュラムとの整合性に関して分析する。人文社会系教養科目は、学科制では39科目78単位、課程制では31科目62単位という、工学系単科大学としては充実した人文社会教育カリキュラムを実現している。現行のカリキュラムは、学修・教育到達目標に沿った体系化と、学生（卒業生）の質を保証する、という2つの観点から2010年度に大幅な改訂を行ったものである。改訂にあたっては、人文・社会・総合というそれまでの科目群区分に加えて、「基礎教養科目」「基礎スキル科目」「展開教養科目」という第2の軸を取り入れることとした。1年次から履修できる基礎的・入門的な科目「基礎教養科目」と、3・4年次となり基礎力が付いてから履修することができる応用的・展開的な科目「展開教養科目」とに科目を整理し、人文社会的な知識を段階的・体系的に身につけることができるようにした。さらに、学生の質保証を目的として、文章能力や自己表現能力を身につけさせる「基礎スキル科目」という区分を新設（統廃合）した。

「基礎教養科目」としては「現代日本の社会」などの社会的な基礎知識を習得させる科目を拡充し、「基礎スキル科目」では「レポートライティング」「プレゼンテーション入門」「自己表現とコミュニケーション」などの科目を新設・拡充している。「展開教養科目」では、3・4年次における履修を強化するため豊洲キャンパスの開講科目を計画的に増やしている。

人文社会系教養科目は、講義科目を中心としつつ、少人数の演習科目も整備している。講義科目では、毎回の講義に対する理解を小レポート、中間試験、期末試験などにより評価する。演習科目では、人文社会的な基礎知識と自己の専門分野とを関連させ、問題解決に応用する訓練を行っている。

加えて、人文社会系教養科目の教員は、教職課程の教育にも貢献している。具体的に

は、教職の必修科目である「日本国憲法」を専任教員 1 名および非常勤講師 1 名が担当し（専任教員 1 名が統括している）、教職の選択必修科目である「情報技術と現代社会」を専任教員 1 名が担当している。

2. 分析を踏まえた長所と問題点

人文社会系教養科目の教育方針は、2009 年度の学群制度の導入を契機に整備された。当初から分野横断的な授業を実施しており、学科制から課程制に移行した現在も、各学科／コースの学生を対象とする方針が維持されている。現在の教育方針は、工学部の掲げる「豊かな教養を涵養する体系的学修」「他者との共生」というカリキュラム・ポリシーや社会の要請に十分に沿ったものと認識している。

各課程の学修・教育到達目標との整合性に関しては、工学部教育に関連・寄与する人文社会教育という方針に則り、全体として相当程度対応するカリキュラムを実現できていると考える。豊洲で開講数を増やしている「展開教養科目」については、受講科目が減り就職活動も終えた 4 年生が純粋に学修意欲から履修するケースや、卒業研究に社会的要素が含まれる学生がヒントや助言を求めて履修するケースなど、明らかな効果が見えてきている。

「基礎スキル科目」については、就職活動との関連もあって各学科／コース・学生からのニーズがきわめて大きくなっている。「少人数授業」が求められる科目の性質上、履修者数の増加は開講コマ数の増加に直結するため、漸次コマ数を増やしてきた。

一方、開講コマ数の増加に応じて非常勤講師に依存する授業科目も増えてきた。この問題に対し、教育の質を保証する目的のため、各専任教員が各自の専門分野との近接性の観点から非常勤講師を統括する体制を整えている。今後も各分野の専任教員の分担による責任統括をより一層徹底して行い、個々の科目の内容的充実を図るとともに、人文社会教育全体の体系化を推進していく。

3. 改善・発展方策と全体のまとめ

人文社会科目運営会議を中心に、マネジメントサイクルを円滑に回し、工学部のカリキュラム・ポリシーおよび社会の要請を反映した教育方針の恒常的な見直しを行う。

グローバル化時代に対応できる広い視野と柔軟な思考力・応用力を養うこと、および就業力の強化に資することを目指し、大学 4 年間を通じた教養教育を推進する。

大学をとりまく環境の変化によって、新入生の基礎学力確保、就職に備えた社会的スキルの向上など、基礎・教養科目、特に人文社会系教養科目に対する要求は増大しつつある。工学部においては、初年時導入教育の検討を進めており、そこでの検討によって人文社会系教養科目も一定の役割を果たすことになると考えている。

単に表面的な教養としての知識を身に付けさせるのではなく、「工学系の多くの大学で

行われてきた知識偏重の傾向と、「如何に創るか」に力点がおかれた教育」でもなく（このような傾向・教育を見直すことが工学部カリキュラム・ポリシーにおいても述べられている）、社会人として主体的に倫理的判断を行い、社会的責任に基づいて行動できるような人材の育成を目指す。具体的には、就業力の強化に資するための「スキル系科目」、学生の人格陶冶を主眼とする「基礎教養科目」、そしてグローバル化時代に対応できる広い視野と柔軟な思考力・応用力を養うための「展開教養科目」を学部４年間にわたって段階的・系統的に配置することで、教養教育を充実させることを目指す。

科目全体としては、引き続きカリキュラムの大綱化、充実化、整合化、スリム化に向けて、個々の科目および体系全体の改善に努める。

4. 根拠資料

1-1 学修の手引 工学部 2025

1-2 学修の手引 工学部 2025

第2章 教員

1. 現状分析

人文社会科目は、専任教員6名（うち1名は建築学部所属）と非常勤講師13名（ほか3名は2024年度末で契約終了）の教員で構成されている。教職科目の一部が人文社会系教養科目として開講されているため、それら教職科目担当者とも連携を図っている。

2. 分析を踏まえた長所と問題点

人文社会系教養科目の運営組織である科目運営会議は、専任教員6名（うち1名は建築学部所属）で構成されており、定期的を開催したうえで情報共有を綿密に行っている。共有した情報は、各専任教員が世話係を担当する非常勤講師に必要なに応じて連絡し、周知させている。

各コースとの連携体制は、以下の表のとおりである。2019年度から工学部基礎・教養科目の教員は専門学科に分属し、2024年度から各課程の担当教員となった。各専任教員は、所属する学部・課程・コースの会議に出席するとともに、そこで得られた情報を科目運営会議で報告するなどして情報共有を行っている。

学部	課程	コース	人文社会科目の専任教員数（所属）
工学部	機械工学課程	基幹機械コース 先進機械コース	1名
	物質化学課程	環境・物質工学コース 化学・生命工学コース	0名
	電気電子工学課程	電気・ロボット工学コース 先端電子工学コース	1名
	情報・通信工学課程	情報通信コース 情報工学コース	2名
	土木工学課程	都市・環境コース	1名
建築学部		建築学科	1名

専任教員の定年退職に伴い、課程長との調整のもと、新任教員が新たに2名人文社会科目に加入した（倫理学系教員と社会科学系教員）。教員の年齢構成は50代が2名、40代が2名、30代が2名と刷新が図られた。スキルに長けた教員が定年退職し、組織の若年化が急速に進んだことへの不安はあるものの、定年退職する教員から新任の教員への

引継ぎを念入りに実施するなどして円滑な運営体制に努めている。

3. 改善・発展方策と全体のまとめ

今後予定されている人文社会科目の合同化（全学開講・学部間開講）に向けて、システム理工学部およびデザイン工学部の教員とも連携を図る。なお、合同化の実施は、課程制完成年度まで保留となっている（工学部では 2024 年度から 4 年間、システム理工学部では 2026 年度から 4 年間）。

4. 根拠資料

2-1 学修の手引 工学部 2025

2-2 学修の手引 工学部 2025、2025 年度 教員ハンドブック

第3章 教育プログラム

1. 現状分析

専任教員による教育プログラム改善への具体的取り組みは、以下のとおりである。

科目名	授業形態	専任・非常勤の別（複数コマの場合人数）	開講数	学生の参加度合い	授業科目の内容
応用経済学	講義	専任	2(前期1、後期1)	AL型授業	履修者に回帰分析を用いたレポートを提出させ、担当者がレポートの論理構造を吟味したうえで添削し、学生へ返却。その後、学生には改訂版のレポートを再提出してもらう。以上のことを、学期中に複数回行っている。
福祉と技術	講義	専任・非常勤（3人）	4(前期2、後期2)	AL型／実習型授業	障害当事者の講師およびゲストスピーカーを交えた議論や疑似体験を行い、履修者に課題を認識させている。
認知心理学	講義	専任・非常勤（1人）	4(前期2、後期2)	AL型授業	認知心理学の基本的な理論や現象について体系的に学習する。そして学問的には誤っているが大衆には受け入れられている心理学用語についても紹介し、アカデミックとしての心理学との違いを認識させている。また、授業中に実験を頻繁に行い、体験による心の理解も図っている。学生には授業後に毎回小テストを課し、理解度を確認している。
法学入門	講義	専任	4(前期2、後期2)	AL型授業	授業期間中に立法があったり裁判が進行したりするため、解説を加え、授業期間終了後

					も学生が自ら調べ、考えることができるようにしている。裁判を傍聴し、課題レポートを提出させている。時事問題を中心とし、学生の関心に応じてグループディスカッションも行い、アンケートに回答するかたちで結果および考察などをまとめさせている。
地域と環境	講義	専任	1(前期 1)	AL 型授業	前半は、世界と日本の事例から持続可能性 (SDGs) に関する講義を実施し、毎回小テストとミニツツペーパーを提出させている。後半は、持続可能な地域づくりのためのグループワークを行う。2020 年はオンラインホワイトボード Miro を用いてグループワークを実施した。
グローバリゼーション論	講義	専任	3(前期 2、後期 1)	AL 型授業	各回で時事問題を取り上げ、グローバリゼーションの様相を経済的・政治的・社会的・文化的側面から検討する。学生は授業後毎回ミニツツペーパーを提出する。後半はグループディスカッションを実施し、結果を発表させている。
技術者の倫理	講義	専任	4(前期 2、後期 2)	AL 型授業	毎回、技術が原因で過去に起きた事件や事故の事例を取り上げ、倫理的、社会的、法的側面から問題点を検討する。毎回、授業内でのグループ討論と授業後の小テスト (振り返り) を課し、授業内容について受講学生自らが考察を深めることを促している。

哲学・倫理学	講義	専任	4(前期2、後期2)	AL型授業	自然哲学から科学にいたる歴史、科学哲学や技術哲学のトピック、環境・情報・生命倫理の諸問題を取り上げ、授業内でのグループ討論と授業後の小テスト（振り返り）を課し、授業内容について受講学生自らが考察を深めることを促している。
--------	----	----	------------	-------	--

オンデマンド授業への取り組み

授業日	科目名	専任・非常勤の別
5月5日(月・祝)	技術者の倫理	専任
	社会心理学	専任
	レポートライティング	非常勤
	地域と環境	専任
	人間社会と環境問題	専任
	現代の日本経済	専任
5月17日(土)	法学入門	専任
	地域社会学	非常勤
オンデマンド授業日以外	地域と経済	非常勤
	技術者の倫理、哲学・倫理学、人間社会と環境問題、地域と環境、生産と消費の環境論	専任

(1) 実施方法

資料を ScombZ 等で事前に配布し、講義動画を Microsoft Teams 等で配信した。動画を配信するタイミングは、授業前または授業開始時となっており、科目ごとに異なる。動画の内容に基づく小テスト、アンケートまたは課題を設定したり、ScombZ の出席送信により出欠を確認したりしている。

オンデマンド授業日以外の取り組みについて、「技術者の倫理」(専任教員担当クラス)および「哲学・倫理学」においては、合理的配慮を必要とする学生(大人数クラスでの

受講が困難な学生など)や正当な理由により対面授業を欠席する学生(体調不良など、事前に連絡のある学生)の履修機会の確保、および対面授業を受講した学生の授業内容の振り返りの促進のために、オンデマンド教材を作成している(グループ討論のような授業内の活動について適宜修正をしたうえで、Zoomの録画機能を利用して、毎回の授業内容を事前に収録)。対象学生には事前に視聴用リンクを指示や配布物とともに送っている。その他の学生に対しては、対面授業終了後に、ScombZの毎回の「教材」に視聴用のリンクを設けている。「人間社会と環境問題」「地域と環境」「生産と消費の環境論」においては、担当教員が国際学会や調査等で対面授業を実施できない際に、授業動画を作成して配信を行っているほか、対面講義もすべて録画し、復習用に視聴できるようにしている。

(2) 実施にあたって工夫した点や今後の課題

動画を視聴しない、または倍速で視聴することにより、内容を把握していない履修者がいると懸念され、動画を視聴しないかぎり解答、回答、提出または送信できない小テスト、アンケート、課題または出席送信を設定した。必要学習時間を確保するため、フィールドワークと組み合わせてレポートを提出させる、授業内容と関連するイベント(対面・オンライン)を紹介する、または官公庁・公的機関もしくは職能団体等が配信する動画の視聴を促す等の取り組みを続けている。

対面授業をそのまま録画収録するのではなく、オンデマンド受講用に内容を調整した講義動画を作成するようにしている。さらに、合理的配慮の対象学生については、(対象学生との打ち合わせを踏まえて)対面授業の受講を模して、対面授業日・限の直前にオンデマンド教材のリンクを伝えたり、資料を授業開始前に直接手交したりするようにしている(「技術者の倫理」「哲学・倫理学」)。「人間社会と環境問題」「地域と環境」「生産と消費の環境論」のオンデマンド授業については、授業の曜日・時限の時間帯に動画を公開開始としているほか、授業開始時間から標準速度で動画を見た場合に合わせて、ScombZで実施する小テストの受験可能時間を設定している。

オンデマンド授業日に、大宮キャンパスの教室からオンライン(ライブ)で配信する(録画して、授業後に動画をオンデマンド配信する)教員がいることも考えられ、非常勤講師を含めて次の注意喚起を行った。

- スクールバスの運行状況
- 学生課および情報イノベーション課による対応
- 館内出入口の開錠
- 教室の開錠・予約状況

(3) デジタル技術の活用による教育効果

(学修者中心の教育への改善、学びの個別最適化など)

履修者が、個々のスケジュールの中で自ら学習計画を立て、締切りや試験実施日等を意識して行動することにより、計画性が培われる。自分のペースで学習を進め、分から

ない箇所は動画の再生を繰り返したり自ら調べたりすることにより、履修者の理解が深まる。履修者が主体的に取り組むことで、授業内容に関連する諸問題に関心を持ち、広い視野で課題解決能力を養うことが期待される。

2. 分析を踏まえた長所と問題点

AL 型授業の運営および DX の活用などにより主体的な学びを促し、学生のニーズに応えることができるよう工夫を凝らしている。工学部・建築学部における課程・コース／学科横断的な授業が多く、(留学生も含めて) 多様な背景をもつ履修者同士が相互に影響を与えることも重視している。

一方、講義科目における大規模授業による教育効果の減退という課題に直面することが多いが、人文社会科目においては履修者制限を実施したり同一科目のコマ数を拡充したりするという方法で対処してきている。後者については、専任教員と非常勤講師とで緊密な打合せを行って内容の統一に努めており、教育内容の質の保証を行っている。

3. 改善・発展方策と全体のまとめ

今後予定されている人文社会科目の合同化（全学開講・学部間開講）に向けて、経済学系の科目をはじめとして、シラバスの調整を進める。異なるキャンパスにおける同時開講の実施を始めており、今後同様な形式での開講の拡充も検討している。

4. 根拠資料

3-1 学修の手引 工学部 2025

3-2 学修の手引 工学部 2025